

琉球大学学術リポジトリ

琉球語の終止形：沖縄謝名方言と沖縄安慶名方言

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): 沖縄方言, 終止形, 動詞, ムード・テンス・アスペクト, 認識的モダリティー, 証拠性, 直説法, 質問法 キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久, 島袋, 幸子, かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2408

琉球語の終止形

— 沖縄謝名方言と沖縄安慶名方言 —

かりまた しげひさ・島袋 幸子¹⁾

キーワード：沖縄方言、終止形、動詞、ムード・テンス・アスペクト、認識的モダリティ、証拠性、直説法、質問法

0. はじめに

沖縄本島北部の今帰仁村謝名方言（以下、謝名方言）と沖縄本島中部のうるま市安慶名方言（以下、安慶名方言）のふたつの方言の動詞の文法的な形の終止形中心に概観する²⁾。記述は、ふたつの方言を比較し、その共通性と差異性を述べながら、それぞれの方言の述語形式の特徴をあきらかにする。

1. 動詞、形容詞、および述語になる名詞

(1) 謝名方言、安慶名方言、いずれも、述語になる動詞、形容詞、名詞は、文法的なカテゴリーとしての、みとめかた、ていねいさ、ムード、テンスを表現するための、さまざまな文法的な形をもち、その文法的な形は、組織された活用形の体系をもっている。

両方言ともに、動詞は、アスペクト、ヴォイス、やりもらいなどの文法的なカテゴリーをもっているが、形容詞、述語名詞は、これらのカテゴリーをもっていない。語彙的な意味として人やものの動的な現象をあらわす動詞は、形容詞、述語名詞の述語形式にくらべて、ムード・テンス・アスペクトを表現する文法的な形の体系を複雑に発達させている。

動詞、形容詞、述語名詞は、文のなかでの機能にしたがって、終止形、連体形、連用形、条件形をもつのだが、とくに、「ひとえ文（単文）あるいはいい

1 島袋(狩俣)幸子（琉球大学非常勤講師）

2 謝名方言の資料は島袋(1955年生)の内省を、安慶名方言の資料はかりまた(1954年生)の内省でえられたものを中心にするが、それぞれ現地での臨地調査によって確認している。

きり文（主文）において、述語の位置にあらわれてくる動詞の、さまざまな文法的な形のセット」としての終止形finite formは、複雑なテンス・アスペクト・ムードの体系をもっている¹³。

2. 動詞の終止形

動詞の終止形は、文のあらゆるモダリティー表現のセンターとしてはたらいでいて、さまざまなムードをあらわしわかる多様な形が存在する。

両方言ともに、疑問詞をともなう質問文の述語になる専用の形式と、YesNo質問文の述語になる専用の形式がある一方で、ものがたり文（平叙文）の述語になる直説法の形は、基本的には、そのままの形でたずねる文の述語としては使用されない。そこで、終止形をものがたり文の述語になる「直説法」、たずねる文（質問文）の述語になる「質問法」、はたらきかける文（命令文）の述語になる「はたらきかけ法」のみつつにわけることにする。

直説法と質問法は、テンスにしたがって非過去形と過去形の対立をしめすが、はたらきかけ法にはテンスの対立がみられない。標準語などとはことなり、両方言とも過去の出来事を話し手（発話主体）が知覚（直接確認）したことを明示する過去形と、話し手の知覚を明示しない過去形のふたつがある。知覚を明示しない過去形を第1過去形、知覚を明示する過去形を第2過去形とよぶ¹⁴。第2過去形は、過去のある時点に実現した動作や変化を話し手が知覚してつたえる、証拠性evidentialityとかかわる主体的な認識的ムード形式である。

- 1) k'inu: ?ja: nagu: ?idzi: ?
（昨日 お前 名護（に）行ったか。）
?iN, ?idzaN.
（うん、行った。）

3 奥田靖雄(1993)。

4 沖縄の人たちの話すウチナーヤマトゥグチ（琉球語と日本語の接触言語のクレオール）ではこの第2過去形を「食ベヨッタ」「飲ミヨッタ」「シヨッタ」といい、ウチナーヤマトゥグチの第2過去形も話者の直接確認をあらわす形式である。西日本方言の「しよった」と形のうえで似るが、その文法的な意味はことなる。以下、第2過去形を「シヨッタ」に訳す。

- 2) k'inu: ?ja:N saki: nudi:?
 (昨日、お前も 酒を 飲んだか。)
 ?iN, nudaN.
 (うん、飲んだ。)
- 3) p'upp'u:ja ku:nu hit'imit'i pe:k'u nagu:tzi ?it3utaNna:?
 (じいさんは 今朝 早く 名護に 行ったか?)
 ?iN, ?it3u:taN.
 (うん、行った。)
- 4) t3att3a:ja k'inu: saki: numuti:?
 (お父さん 昨日 酒を 飲んだ?)
 ?iN, numi:taN.
 (うん、飲んだ。)

用例の1) 2) の下線部の語形が第1過去形で、話し手の知覚を問題にしていない。3) 4) の第2過去形は、聞き手が目撃したことを前提に質問し、質問された人も「おじいさんが行く」「酒を飲む」のを目撃したことを明示する第2過去形を使用してきたている。

知覚を明示しない第1過去形は、形容詞、述語名詞にも存在するが、知覚を明示する第2過去形は動詞にしか存在しない⁵⁾。第2過去形が動詞にのみ存在するのは、後述するように第2過去形の語形成のありかたとかかわっている。

謝名方言の動作動詞の普通体・肯定の完成相の終止形のパラダイムを以下にかかげる。後述するように謝名方言には「du むすびたずね」の形がないが、安慶名方言には du むすびたずねがあるので、枠だけかかけておく。

5) 形容詞、述語名詞には過去形が1系列しかなく、知覚の有無による対立をもたない。それは後述する存在動詞でも同様である。存在動詞のばあい、謝名方言では第2過去形相当形式がみられ、安慶名方言のばあい、第1過去形相当形式がみられる。

ムード		テンス		非過去	第1過去	第2過去
		断定	推量			
直 説 法	断定	一般むすび		hat3-uN	hatt3-aN	hat3-u:taN
		du むすび		hat3-uru	hatt3-aru	hat3-u:taru
	推量	一般推量		hat3-ura padzi	hatt3-ara padzi	hat3-u:tara padzi
		kuse:推量		hat3-ura	hatt3-ara	————
質 問 法	Yes-Noたずね			hat3-umi	hatt3-i:	hat3-u:tʔi:
	疑問詞たずね			hat3-uga	hatt3-aga	hat3-u:taga
	du むすびたずね					
	念おしたずね			hat3-ura	hatt3-ara	(hat3-u:tara)
命令				hak'-i, hak'-e:, hak'-iba,		
勧誘				hak'-a:		

謝名方言と安慶名方言の存在動詞 ?aN (有る) と 'uN (居る) のパラダイムをあげる。ふたつの動詞は、両方言ともに継続相をもたない点で運動動詞 (hat3uN 書くなど) とはことなる。しかし、両方言の存在動詞は、過去形に第1過去形と第2過去形の対立がないという点では共通するが、語形成の面で両方言はことなる。謝名方言の存在動詞には第2過去形があるが第1過去形がなく、安慶名方言には第1過去形があるが、第2過去形がないことである。

謝名方言の ?aN (有る)

ムード		テンス		非過去	第1過去	第2過去
		断定	推量			
直 説 法	断定	一般むすび		?aN		?aitaN
		du むすび		?airu		?aitaru
	推量	一般推量		?aira padzi		?aitara padzi
		kuse:推量		?aira		?aitara
質 問 法	Yes-Noたずね			?aimi		?aiti:
	疑問詞たずね			?aiga		?aitaga
	念おしたずね			?aira		?aitara

謝名方言の'uN (居る)

ムード		テンス	非過去	第1過去	第2過去
直説法	断定	一般むすび	'uN		'uitaN
		duむすび	'uiru		'uitaru
	推量	一般推量	'uira padzi		'uitara padzi
		kuse:推量	'uira		'uitara
質問法	Yes-Noたずね		'uimi		'uiti:
	疑問詞たずね		'uiga		'uitaga
	念おしたずね		'uira		'uitara
		命令	'uri: 'ure:		
		勧誘	'ura:		

謝名方言のパラダイムをみてわかるように、謝名方言の?aNと'uNの直説法の一般むすびの非過去形と、'uNのはたらきかけ法(命令形と勧誘形)以外の語形は、第1中止形にさらに'uN、あるいは、'utaNがくみあわさって融合した形である。非融合型の一般むすび非過去形、はたらきかけ法と、融合型の活用形が同居しているのである。

*?ar i · 'utaN > *?arjutaN > *?ajutaN > ?aitaN (有った)

*'uri · 'utaN > *'urjutaN > *'ujutaN > 'uitaN (居た)

安慶名方言の?aN (有る)

ムード		テンス	非過去	第1過去	第2過去
直説法	断定	一般むすび	?aN	?ataN	
		duむすび	?aru	?ataru	
	一般推量		?aru hadzi	?ataru hadzi	
質問法	Yes-Noたずね		?ami	?ati:	
	疑問詞たずね		?aga	?ataga	
	duむすびたずね		?arui	?atarui	
	念おしたずね		?ara	?atara	

安慶名方言の 'uN (居る)

ムード		テンス		非過去		過去	
						第1過去	第2過去
直 説 法	断 定	一般むすび	'uN	'utaN			
		duむすび	'uru	'utaru			
	一般推量	'uru hadzi	'utaru hadzi				
質 問 法	Yes-Noたずね	'umi	'uti:				
	疑問詞たずね	'uga	'utaga				
	duむすびたずね	'urui	'utarui				
	念おしたずね	'ura	'utara				
	命令	'uri	'ure:				
	勧誘	'ura					

それに対して安慶名方言の存在動詞は、'uN 非融合型の活用形である。尾略形 apocopated form が語幹になっていて、それに語尾がついているとみるべきなのであろう。

形づくりの面からみると、両方言の終止形の直説法、質問法の非過去は、連用語幹に語尾 -uN、-uru、-ura、-umi、-uga などがついている。第2過去形は連用語幹に語尾 -u:taN、-u:taru、-u:tara、-u:tami、-u:taga がついている。第1過去形は音便語幹に語尾 -aN、-aru、-ara、-ami、-aga、-arui がついている。直説法は基本語幹に語尾の -i、-e:、-a: がついている。

完成相 (の形式) の語幹がみつ (基本語幹、音便語幹、連用語幹) 存在するのは、完成相の語形成の歴史に由来する。完成相の非過去は、第1中止形 (連用形) に存在動詞 'uN (居る) が文法化してくみあわさり、音韻的に融合したものである。第2過去形の系列は、完成相非過去と同じく、第1中止形に存在動詞 'uNの過去形 'utaN (居た) がくみあわさっている。

*numi · 'uN > numjuN > numiN / numuN (飲む)

*numi · 'utaN > numjutaN > numi:taN / numutaN (飲ミヨッタ)

第1過去形は第1中止形+接辞 -te+ʔaŋ (有る) が融合した形式であり、古代日本語「シタリ」に対応する。強変化動詞の第1過去形は基本語幹の語末の子音のちがいによっていろいろな変化をとげた結果、動詞のタイプごとに語幹末子音と語尾が融合して促音便、撥音便、イ音便などの音韻変化をひきおこした。両方言の第1過去形は、さらに語幹末の促音、撥音、イが脱落して「脱落音便」化して、語幹が再編成されている。この語幹が「音便語幹」である。第2中止形、継続相の形式、パーフェクト相の形式などが音便語幹をもつ。

基本語幹、音便語幹、連用語幹のみつつの語幹は、連体形、連用形、条件形などの活用形の構成要素にもなっている。日本語標準語にも基本語幹と音便語幹のふたつの語幹があるのだが、連用語幹は、琉球語のなかの奄美沖繩諸方言に特徴的にみられるものである。

	基本語幹	音便語幹	連用語幹
謝名方言	hak'-e: (書け)	hat-tʒaŋ (書いた)	hatʒ-uŋ (書く)
	tur-e: (取れ)	tut-taŋ (取った)	tu-N (取る)
	jum-e: (読め)	ju-daŋ (読んだ)	jum-iŋ (読む)
安慶名方言	kak-e: (書け)	katʃ-aŋ (書いた)	katʃ-uŋ (書く)
	tur-e: (取れ)	tu-taŋ (取った)	tu-iŋ (取る)
	jum-e: (読め)	ju-daŋ (読んだ)	jum-uŋ (読む)

鈴木重幸(1960)、上村幸雄(1963)などの先行研究がのべるように、奄美沖繩諸方言の完成相の非過去形は、第1中止形に存在動詞 'uŋ(居る) をくみあわせてできている⁶。奄美沖繩諸方言の完成相の語形成は、アスペクト・テンズ・ムード体系におおきな影響をあたえている。

終止形のばあい、直説法、質問法のうち、非過去形と第2過去形は、連用語幹を構成要素とするのに対して、第1過去形は、音便語幹を構成要素としている。それに対して、はたらきかけ法の命令形と勸誘形を構成する語幹が基本語幹である。基本語幹は、上記の連用語幹、音便語幹の出発点となる語幹である。

6 服部四郎(1952)が最初に指摘し、鈴木(1960)、上村(1963)も首里方言の動詞「終止形」が「連用形(第1中止形)+居り」であることを述べている。

連用形は非融合型であり、条件形には融合型の活用形と非融合型の活用形が並存している。融合型の活用形と非融合型の活用形が並存するのは、動作、変化の進行をあらわしていた融合型の動詞と、ひとまとまりの動作や状態をあらわしていた非融合型の動詞とが統合し、直説法と質問法では融合型の活用形が優勢になり、はたらきかけ法では非融合型が優勢になったためだとかんがえられる。条件形や連体形でも並存している。

非融合型と融合型との統合は、完成相の非過去形のテンス・アスペクト的な意味のあらわれかたにもみることができる。鈴木(1960)、上村(1963)によると、首里方言動詞の非過去形「ユヌン(読む)」は、未来に実現する動作や変化をひとまとまり的にあらわすだけでなく、発話の瞬間アクチュアルに進行している動作や変化をあらわすこともできた。これは、完成相をあらわしていた非融合型の動詞と、進行相をあらわしていた融合型の動詞とが統合したことによって生じたものである。鈴木(1960)ではつぎのように指摘されている。

<現在形> ('junuN 読む) 未来の動作、特定の時間にかかわりのない動作を表すほかに、現在の動作を表すことができる。この点、標準語の yomu などとちがっていて、くわしい調査が望まれる。たとえば、となりのへやにいる人に、

nuu sjuga? (なにをしているのか?)

とたずねることもできるし、となりのへやの人がそれに対して、

siNbuN 'junuN. (新聞を読んでいる。)

と答えることもできる。

標準語ではこういうばあい、持続態の形 site iru ka, yonde iru を使わなければならないところである。首里方言の基本態の肯定現在形のなりたちが、連用形('jumi) と存在動詞'uNとの融合形であることと関連のある現象であって、興味ぶかい。

しかし、津波古敏子(1992)によると、最近の首里方言話者のばあい、非過去形で未来の動作や変化をひとまとまりにあらわすが、目のまえでアクチュア

ルに進行する動作や変化をあらわしにくくなっているようである¹⁷。

安慶名方言の非過去形 *jumuN* (読む) は未来のひとまとまりの動作や変化、特定の時間にかかわらない出来事をあらわすが、進行中の動作や変化をあらわすことはできない。いっぽう、謝名方言の非過去形は、未来の動作や変化をひとまとまりのものとしてあらわすことも、目のまえでアクチュアルに進行する動作や変化もあらわすこともできる¹⁸。非過去形にかんしていえば、謝名方言は、進行相の意味を完全にうしなっていないのに対して、安慶名方言は、進行相の意味をうしない、完成相の意味をあらわす形式に移行している。

過去形のばあいは、事情が少しちがう。非融合型の第1過去形と融合型の第2過去形が並存している。目の前でアクチュアルに進行する動作や変化をあらわしていた第2過去形が話し手による知覚を明示する形式に移行している。第2過去形に、話し手自身の動作や変化をあらわせないという人称制限や、話者の知覚できない歴史的な過去の事実、はなれた場所でおこった出来事などをあらわせないなどの制約があるのは、第2過去形が進行相の過去をあらわしていたということによるのだろう。

3. 終止形のテンス・アスペクト・ムード

安慶名方言のテンス・アスペクト形式は、完成相 *suN* (する) と継続相 *so:N* (している) の対立を、謝名方言は完成相 *suN* (する) と継続相 *ſitʒuN* (している) の対立を基本としていて、いずれも完成相／継続相の2項対立型の体系のようにみえる。その点だけをみれば、標準語のそれに似ている。

しかし、いくつかの点で標準語とことなっている。まず、それぞれの形式の成り立ちがことなる。完成相 *suN* は、第1中止形に 'uN (古代日本語の「をり」に由来) が文法化して接続していて、かたちのうえでは西日本方言のシヨルに対応する。継続相 *so:N* も *ſitʒuN* も第2中止形に 'uN が文法化して接続したもので、イル (古代日本語「坐る」に由来) が接続している東日本方言や

7 津波古(1992)を参照。

8 謝名方言の完成相非過去形が話の瞬間に話し手の目のまえで進行する動作や変化をあらわすことができるということについては島袋幸子(1987)、島袋幸子(1992)、狩俣繁久・島袋幸子(1989)ですでに述べている。

安慶名方言

テンス ムード	非過去	過去	
		第1過去	第2過去
完成相	suN (する)	saN (した)	sutaN (シヨッタ)
継続相	so:N (している)	so:taN (していた)	
パーフェクト相	se:N (してある)	se:taN (してあった)	

謝名方言

テンス ムード	非過去	過去	
		第1過去	第2過去
完成相	suN (する)	ʃitʒaN (した)	su:taN (シヨッタ)
継続相	ʃitʒuN (している)	ʃitʒu:taN (していた)	ʃitʒuitaN ((してイヨッタ)
パーフェクト相	ʃitʒeN (してある)	ʃitʒe:taN (してあった)	

標準語のそれとはことなり、かたちのうえでは西日本方言のシトルに対応する。

両方言ともに、完成相過去形に第1過去形と第2過去形のふたつの過去形がある。これは西日本方言とも東日本方言ともことなる。第2過去形は第1中止形に、'utaN (過去形) がくみあわさり音声的に融合したもので、かたちのうえでは西日本方言のシヨッタに対応するが、意味的には「しよった」とはことなり、話者が知覚して確認したアクチュアルな過去の出来事をあらわす認識的ムードの形式で、人称の制限があって話し手を主語にすえることができない。

両方言には動作や変化が達成されたあとの客体結果や痕跡、効力をあらわしたり、のこされた結果や痕跡など客観的根拠にもとづく推論をあらわしたりする形式がある。この形式は第2中止形に ?aN が融合したもので、かたちのうえでは標準語のシテアルに相当する。

*nudi・?aN > *nudiaN > nudeN / nude:N (飲ンデアル)

*ʃidʒi・?aN > *ʃidʒiaN > ʃidʒeN / ʃidʒe:N (死ンデアル)

*?ati・?aN > *?atiaN > ?ateN / ?ate:N (有ッテアル)

標準語のシテアルが客体変化動詞にかぎってあらわれ、客体の変化結果をあ

らわすのと異なり、両方言のパーフェクトをあらわす形式 *ſitʒeN* は、動詞に制限がなく動作動詞にも状態動詞にもあって、痕跡や推論をあらわすことができる。パーフェクト相は、主体動作動詞、主体変化動詞の、先行時における動作や変化の間接的偶然的な結果（痕跡）や客体変化動詞の客体にあらわれた変化結果をあらわすテンス・アスペクトの意味をあらわすと同時に、客観的根拠にもとづく推論という認知的モダリティーにもかかわっていて、テンス、アスペクト・ムードがからみあった複合的な形式である。

第2過去形は、安慶名方言の継続相にもパーフェクト相にもみられない。それに対して、謝名方言の継続相には第2過去形がみられる。ただし、謝名方言のパーフェクト相にも第2過去形はみられない⁹。

3.1. ムード

動詞の終止形は、ムードによって直説法、質問法、はたらきかけ法の形式をもっている。直説法の断定にも推量にも、質問法の YesNo たずねにも疑問詞 たずねにも、テンスのカテゴリーによる非過去形と過去形（第1過去形と第2過去形）が対立するが、はたらきかけ法は、テンス対立をもたない。

第2過去形は、過去のアクチュアルな動作・変化についていうとき、人称制限があって、1人称の動作・変化についていうことはできないし、話し手が直接確認できない歴史的な過去の事実についていうこともできない¹⁰。質問法の第2過去形は、聞き手を主語にして聞き手自身の動作や変化についてたずねる文の述語にならない。このばあい第1過去形を使用する。話し手自身の過去のアクチュアルな動作や変化、歴史的な過去の事実は、第1過去形を使用する。

第2過去形は、過去のひとまとまりの出来事を知覚してつたえることもできるが、過去の時点にアクチュアルに進行していた動作や変化をあらわすことができる。主体変化動詞がアクチュアルに進行していた変化をあらわすとき、変化の終了限界達成（動詞によっては開始限界達成）をふくむことが義務的にな

9 第2過去形は、安慶名方言、謝名方言いずれの動詞の否定形式にもみられないし、形容詞（第1形容詞、第2形容詞）、述語名詞にもみられない。

10 安慶名方言の終止形のアスペクト・テンス・ムードについては、かりまた(2004)にややくわしく書いたのでそれを参照していただきたい。

るなどの条件がともなう。第2過去形には人称制限もあって、そこには、テンス・アスペクトという時間的側面と、ムードとがわかちがたくからみあって存在している。テンス・アスペクト・ムードの一体性については奥田靖雄(1996)、工藤真由美(2004)がのべている。また、工藤真由美(2004)は、沖縄方言のテンス・アスペクト・ムードの一体性についてについてのべている。

3.1.1. 直説法

直説法は、現実の出来事を確認しつたえるのだが、「直接的な経験にあたえられる」動作を表現するいきり文の述語になる「断定の形」と、「経験のなかにすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をよりどおろに、そこから想像あるいは思考によってあらたにひきだされるできごとをえがきだしている」おしはかりの文の述語になる「推量の形」のふたつが対立している¹¹。直説法というムード形式のなかで「断定」と「推量」は確認のしかたで対立している。

安慶名方言 numuN (飲む)

			非過去	第1過去	第2過去
直 説 法	断 定	一般むすび	numuN	nudaN	numutaN
		duむすび	numuru	nudaru	numutaru
	一 般 推 量	numuru hadzi	nudaru hadzi	numutarru hadzi	

謝名方言 numiN (飲む)

			非過去	第1過去	第2過去
直 説 法	断 定	一般むすび	numiN	nudaN	numi:taN
		duむすび	numiru	nudaru	numi:taru
	推 量	一般推量	numira padzi	nudara padzi	numi:tara padzi
		kuse:推量	numira	nudara	

11 奥田靖雄(1984)p.59.

3.1.1.1. 断定

両方言をふくむ、ほぼすべての琉球語諸方言に係助辞=duが存在し、主語、補語、状況語などの文の部分に係助辞=duが後接すると、その文の部分がさししめすことがらをとりたてる（指定強調の）強調文になる¹²。両方言に=duと呼応してあらわれる専用の述語形式があって、非強調文の述語になる一般むすび形と対立する。強調文専用の述語形式をドゥむすび形とよぶことにする。断定は、ドゥむすび形と一般むすび形のふたつの形によって構成される。例文5) 7) 9) が一般むすび形で、6) 8) 10) がドゥむすび形である。

- 5) neNgad3o:ja wa:ga hat3uN.
(年賀状は 私が 書く。)
- 6) neNgad3o:ja t3att3a:gadu hat3uru.
(年賀状は 父が 書く。)
- 7) k'inu: ?arikati tigami hatt3utaN.
(昨日 あいつに 手紙を 書いた。)
- 8) ?unu tigami k'inu:du hatt3aru.
(その 手紙は 昨日 書いた。)
- 9) kissa ?ariga hat3u:taN.]
(さっき あいつが 書キヨッタ。)
- 10) tigamija p'app'a:gadu hatt3utaru.
(手紙は 祖母が 書キヨッタ。)

一般むすび形には終助辞=do:, =ja:, =te:, =na:, =saなどがついて、モーダルな意味をつけくわえる。ドゥむすび形にはこれらの終助辞はつかず、ドゥむすび形でいいきる。

12 係助辞=duは、古代日本語の係助辞「ぞ」に対応するもので、いいおわりの述語の専用形式があること、その形式が連体形と同音形式になることなども、古代日本語のばあいと似る。ただし、今帰仁方言のばあい、動詞や形容詞の連体形は、ドゥむすび形と同じ形にはならない。接続する語の語末のフォネームによっては異形態「=ru」もある。

3.1.1.1.1. 非過去形

両方言ともに、非過去形は、未来の動作や変化をあらわすのだが、謝名方言の suN 形は、話の瞬間に進行する動作や変化をあらわすことができる。謝名方言の suN 形が動作の進行や変化の進行をあらわすことができるのは、連用形に存在動詞'uNが融合していることによるのは前述したとおりである。また、suN 形は、反復的な出来事、習慣的な出来事、一般的な法則など、ポテンシャルな出来事をあらわすこともできる。

主体動作動詞、主体動作客体変化動詞（以下、客体変化動詞）、主体変化動詞の suN 形は、計画されて実現が確実な予定、これまでの経験、状況、兆候などから実現が確実な未来の出来事をひとまとまりのものとしてあらわす¹³。述語動詞が意志動詞で、主語が1人称のとき、話し手（1人称）の意志や決意をあらわす。

- 11) punija ?at3a: ?uNteNkat'i ?iN.
(船は 明日 運天(港)に 入る。)
- 12) p'app'a:ja ?umu: niNditzi, p'i: mo:suN.
(祖母は 芋を 煮るといって、火 燃やす。)
- 13) watt'a:ja ?at3a: ?itJukut'u sak'i: numiN.
(私たちは あした 従兄弟と 酒を 飲む。)
- 14) reidzo:k'okat'i ?iNruNditzi suik'wa t3iN.
(冷蔵庫に いれようと スイカを きる。)
- 15) namma:ra waNja nagumadi ?att3uN.
(これから 私は 名護まで 歩く。)
- 16) k'ura:k'u natt'uit'u pafiri k'u:ruN.
(暗く なっているので、戸を 閉める。)

謝名方言の主体動作動詞、主体変化動詞、客体変化動詞の非過去形は、話の

13 動詞の語彙文法的な分類は、工藤真由美(2000)による。

瞬間に進行している動作をあらわすことができる。このとき、目のまえで進行している動作をいうばあいには限定され、目撃性が義務的である。

主体動作動詞、客体変化動詞の *suN* 形が動作の進行をあらわすとき、1人称を主語にすることができる。このばあい、述語 *suN*(する) を *ſitʒuN*(している・非過去) におきかえることができる。しかし、*ſitʒuN* 形はその動作の継続過程の知覚がなくても使用することができ、*ſitʒuN* 形がおおくつかわれる。

17) ?ja: nu: numiga?

(君、何を のんでいるか?)

waNna: tʃa: numiNjo:.

(私か。お茶を のんでいるよ。)

18) ?ja: ?maNt'i nu: su:ga?

(君は ここで 何を しているか。)

waNna: mja:nu kusa: haNjo:.

(私か。庭の 草を 刈っている。)

19) mi:mi:ja nu: su:ga?

(兄さんは 何を している?)

pukaNt'i ?aʃibiN.

(外で 遊んでいる。)

20) tuNgwaNt'i suik'wa tʒiN.

(台所で スイカを 切っている。) お母さんは今何をしているの? と聞かれての返事。母はスイカを切っている最中だ。

21) p'app'a:ga paʃiri ?ak'iruN.

(おばあさんが 戸を あけている。) 戸を開けているのを目の前で見ながら言う。動作の進行の場合でも、開始直前の場合でも使う。おばあさんが戸に近づき、手を戸にかけた時も使う。

安慶名方言のばあい、開始直前をふくむことが義務的であり、進行過程(動

作継続)のみをあらわすことない。また、進行過程をあらわすとき、1人称を主語にしていることもできない。上の17)～20)の例のような場面で非過去形を述語に使用すると、安慶名方言では未来のひとつまとまりの動作をあらわすことになる。この点も安慶名方言は、謝名方言とことなる。

謝名方言、安慶名方言ともに、suN形が主体変化動詞のばあい、目の前でおこっている変化の開始限界達成後の、終了限界達成にむかって進行する変化過程をあらわす。このばあい、1人称を主語にしていることはできない。次の例22)～24)は、独り言のように、あるいは第三者に見るのをうながしている。

22) ?uri, ?uri, ro:sokunu p'i: tʒe:ruN.

(ほら、ほら、ロウソクの火が 消えつつある。)

23) ?ai, p'upp'u:ga pat'a:k'itʒi ?itʒuN.

(あれっ、おじいさんが 畑に 行く／行きつつある。)

24) ?ai ?aʒidʒanu 'u:nu tʒiriruN.

(あれっ、下駄の 緒が (もうすぐ) 切れる／切れつつある。) 下駄の緒が今にも切れそうになっているところを見て。

25) ?ai na: maja:ja ʒinuN.

(あれっ、もう 猫が 死ぬ。) ぐったりしてもうすぐ死ぬ (死につつあって)、終了限界達成の直前であることをあらわす。

主体変化動詞の ʒitʒuN (している・非過去) が主体の変化結果の継続をあらわすのと異なる。

	suN非過去	ʒitʒuN非過去
主体動作動詞	動作の進行	動作の継続
客体動作動詞	動作の進行	動作の継続
主体変化動詞	変化の進行	変化結果の継続

両方言とも suN形は反復的な出来事、習慣的な出来事、恒常的なあるいは一般的な法則をあらわすことができる。

- 26) p'upp'u:ja me:natzi ha:ranu me:ra ?attzuN.
 (祖父は 毎日 川ぞいを 歩く。)
- 27) ju:huruja me:natzi tfo:naNga p'i: mo:suN.
 (風呂は 毎日 長男が 火を 燃やす。風呂をたく意。)
- 28) warabinu muNja suik'wa tza: magi:k'u tziN.
 (子供の 分は スイカを いつも 大きく 切る。)
- 29) tufijuija hit'imit'i pe:k'u ?ukiruN.
 (年寄り は 朝 早く 起きる。)
- 30) basa:nu 'u:ja tju:k'u p'ipp'ariba tziriruN.
 (芭蕉の 糸は 強く 引っ張ると 切れる。)
- 31) mi:nifi puk'iba, tak'a:ja tudi suN.
 (新北風が 吹くと、 サシバは 飛んで くる。)
- 32) ?unu pafirija sugui ?atzuN.
 (その 戸は すぐに 開く。(建付けが悪いから))
- 33) ?itzimufija tufi turiba, muru sinuN.
 (生き物は 年を とれば、皆 死ぬ。)

3.1.1.1.2. 第1 過去形

第1 過去形は、話し手による出来事の知覚の有無に関してニュートラルで、人称制限がなく、話し手自身の過去のアクチュアルな動作や変化についてあらわすこともできるし、話し手が知覚していない出来事についてあらわすこともできるし、とおい過去の歴史的な事実についてあらわすこともできる。

アスペクト的には、動詞の語彙文法的なタイプにかかわりなく、過去のひとまとまりの動作や変化をあらわす。また、効力(動作パーフェクト)、反復する出来事、習慣的な出来事もあらわす。

- 34) waNja guniNme:ni to:k'jo:tzi ?idzaN.
 (私は 五年前に 東京に 行った。)
- 35) ?afi: k'a:t'ina:?

(お昼、食べた?)

?iN, k'a:t'aN.

(うん、たべた。)

36) ?unu ?aʃidʒanu wu:ja kinu: tʒiritaN.

(その 下駄の 緒は 昨日 切れた。)

37) ?unu humuinu ?ju:ja muru ʃidʒaN. nu:ditzigaja:.

(この 池の 魚は 全部 死んだ。なぜだろう。)

38) p'app'a:ja me:natʒi rok'udʒini paʃi:ri ?ak'itaN.

(おばあさんは 毎日 6時に 戸を あけた。)

39) nobunagaja hoNno:dʒiNti ʃidʒaN.

(信長は 本能寺で 死んだ。)

3.1.1.1.3. 第2過去形

両方言いずれの第2過去形も、過去のある時点において実現した動作や変化、あるいは進行過程の動作や変化を話し手が知覚したことをつたえていて、証拠性とかかわる主体的な認識のムード形式である。出来事の知覚は、視覚によるばあいがおおいが、聴覚、味覚、嗅覚、触覚などでもよく、その場に居合わせること(臨場性)が義務的である。第2過去形が話し手による知覚をあらわす形式であることから、第2過去形を述語にもつ文の主語を1人称にしていうことができないという人称制限がある。

主体動作動詞、主体変化動詞などでは継続過程の動作や変化をあらわし、客体変化動詞では開始直後の動作も継続過程の動作もあらわす。

第2過去形は、反実仮想、非実現をあらわすこともできる。また、過去の反復的な、習慣的な出来事を回想してつたえるばあいにも使用することができる。この反実仮想、非実現、反復・習慣をあらわすばあい、人称制限がなくなって、一人称を主語にしていうことが可能になる。

主体動作動詞、客体変化動詞の第2過去形を述語にしていうとき、過去の時点に継続(進行)していた動作や変化をあらわす。主体変化動詞のばあい、終了限界達成(あるいは動詞によっては開始限界達成)をふくむことが義務的で

あり、出来事全体の知覚でもよい。

40) tara:ga dzira: sugurutaN.

(太郎が 次郎を 叩キヨッタ。) 太郎が次郎をたたいたのを目撃。

41) dzira:ga patakinu naha:ra ?at3utaN.

(次郎が 畑の 中を 歩キヨッタ。) 畑の中を歩いているのを目撃。

42) p'upp'u:ja patakitz'i ?it3utaN.

(祖父は 畑へ 行キヨッタ。) 祖父が畑へ向かって行く過程を目撃。

43) maja:ja finu:taN.

(猫は 死ニヨッタ。) 猫が死んでいく過程を目撃している。このばあい、終了限界達成の目撃が義務的。

客体変化動詞の第2過去形を述語にする文は、過去の時点において、話し手が知覚した、動作の開始限界をふくむ開始限界達成直後の動作の継続（進行）過程をあらわす。

44) p'upp'u:ja pa3iri ?ak'irut'aN.

(祖父は 戸を 開ケヨッタ。) 祖父が戸を開け始めたところ、あるいは、開けている最中を目撃。

45) p'app'a:ja suik'wa t3i:t'aN.

(祖母は スイカを 切りヨッタ。) 祖母がスイカを切り始めたところ、あるいは、切っている最中を目撃。

第2過去形は、主体動作動詞、主体変化動詞、客体変化動詞のいずれのばあいでも動作全体（限界達成をふくむ）をあらわすことがあり、完成相化がすすんでいる。両方言を比較すると、安慶名方言の方が謝名方言よりも完成相化している。しかし、そのばあいでも第2過去形は、話し手の知覚を明示し、第1過去形との対立は維持される。

話し手が自分自身の行動について記憶をうしなつて質問したり、あるいは、

夢のなかに登場した自分の行動をのべたりするときには、第2過去形を述語にする文の主語を1人称にすることができる。46) の例は、食後に薬を飲んだかどうか忘れてしまった人が、一緒にいた聞き手に自分が薬を飲んだかどうか尋ねているのである。

- 46) waNja kusui numi:t'i?
(私は 薬を 飲ミヨッタか?)
?iN, numi:t'aN.
(うん、飲ミヨッタ。)

- 47) ?iminu nahaNt'i waN tiNto:ra tubi:t'aN.
(夢の 中で 私が 空を 飛ビヨッタ。)

反実仮想、非実現をあらわす文の述語に第2過去形を使用するばあい、人称制限がなくなり、一人称を主語にしていうことが可能である。

- 48) sak'i:ri ?uma:nu jaga:t'i numi:t'aN.
(お酒とは 思わず あやうく 飲ミヨッタ。)
- 49) jasumidi waharaNgui jaga:t'i figu:t'utzi ?it3ut'aN.
(休みとは わからずに あやうく 仕事に 行キヨッタ。)

第2過去形は、過去の反復的な、あるいは習慣な出来事を回想していうときにも使用される。このばあい、人称制限がなくなって、一人称を主語にしていうことも可能である。第2過去形をもちいるばあい、第2過去形には目撃性がつきまわっていて、具体的なイメージを思い起こすというニュアンスがあり、限られた期間にくりかえされる反復的な出来事をあらわす。

- 50) ?utt'uja hu:sei duJibiNtJa:t'u ju: ?o:ei su:t'aN.
(弟は 幼い頃 友達と よく けんか シヨッタ。) 話し手は弟の過去について回想し、目撃していたので確信を持っている。

- 51) p'upp'u:ja ju: pat'a:k'inu ?abuʃiNt'i kusa: hait'aN.
 (祖父は よく 畑の 畔で 草を 刈リヨッタ。) 祖父の草
 を刈る様子を見ていたので知っているという意味がふくまれる。
- 52) waNja hu:sei ha:raNti ?amirut'aN.
 (私は 小さい時、川で 入浴シヨッタ<浴びた。>)

謝名方言では話し手の直接知覚をあらわす主体的な認識的ムード形式である第2過去形が完成相と継続相にあらわれる。これは、安慶名方言の第2過去形が完成相にのみあらわれるのとことなる。過去の動作を目撃したとき、その動作が開始直前にあったのか、継続の過程にあったのか、変化の過程にあったのかなど、アスペクト的な側面をあらわしわけている。

- 53) tara:ja me:natzi ?unu dʒa:ni 'ittʒuitaN.
 (太郎は 毎日 その 席に 座ッテイヨッタ。)
- 54) tara:ja wa:ga ?itzine: natʒuit'aN.
 (太郎は 私が 行ったとき 泣イテイヨッタ。)
- 55) tara:ja hu:seini: tʒa: natʒut'aN.
 (太郎は 幼い頃 いつも 泣いていた。)

ʃitʒuitaN(シテイヨッタ)は、過去の継続する動作、変化結果の直接知覚というアスペクト・ムード的な意味をあらわす。ʃitʒutaN(していた)も、過去の動作継続、変化結果継続をあらわすが、知覚の有無に関してはニュートラルである。ʃitʒuitaNは知覚をあらわし、1人称を主語にできないという人称制限があるが、ʃitʒutaNには人称制限がない。

ʃitʒuitaNは、直接知覚を明示し、認識的ムードの点でsu:taN(シヨッタ)と共通する面をもつが、過去時における開始限界達成あるいは終了限界達成を含む動作進行、変化進行をあらわすsu:taNとはアスペクト的な意味の面でことなる。

3.1.1.2. ドウむすび形

両方言ともに =du をふくむ強調文の述語になるドウむすび形は、形容詞、述語名詞にもみられる。当該の文が強調文であることは、=du とドウむすび形が明示するのだが、=du とドウむすび形が呼応する現象は「かかりむすび」とよばれる¹⁴。

- 56) gakkō:nu kutuja ʃiNʃi:garu wahairu. watta:gaja waharaN.
 (学校のことは 先生が 分かるんだ。私たちに は わからない。)
- 57) ku:nu ju:baNja p'app'a:garu suko:ruru. watt'a:gaja suko:raN.
 (今日の夕食は 父ちゃんが 作るんだ。私たちに は 作らないよ。)
- 58) ?aNtzi nitzi: ?ainumuNnu, ʃigutu su:nu tzu:nu 'uNna:.
 (そんなに 熱が あるのに、仕事を する やつが いるか。
?isanu ja:katidu ?itʒuru.
 (医者の 家(病院) に いくんだよ。)
- 59) waNja midʒidu nudaru. sakija numaNtando:.
 (私は 水を 飲んだんだ。酒は 飲まなかったよ。)
- 60) kusui nude:turu maʃi nataru. joi niNtuta:nu ba:ja ?araNdo:.
 (葉を 飲んだから、よく なったんだ。ただ 寝ていたわけでは ないよ。)

安慶名方言のドウむすび形は、連体形と同音形式であるが、謝名方言の連体形は、語末が -nu になり、ドウむすび形と連体形は、形がことなる。謝名方言は、直説法・断定の形、ドウむすび形、連体形のみつつの形がことなる。これは、謝名方言をふくむ今帰仁方言（および他の沖縄北部方言も）の特徴で、沖縄中南部諸方言はドウむすび形と連体形が同音形式になっている。

	一般むすび	ドウむすび形	連体形 (非過去)
安慶名方言	num-uN	num-uru	num-uru
謝名方言	num-iN	num-i:ru	num-i:nu

¹⁴ =duがあっても述語がかならずしもドウむすび形にならず、一般むすび形になることもある。この傾向はつよまっている。

61) nu:ditzi kadaga? ja:sadu ?aiti:.

(どうして 食べたんだ? 腹が空いていたのか。)

?atarase:tudu kadaru. ja:saja neNtaNdo.

(もったいないから、食べたんだ。腹は空いていなかった。)

62) ?unu tigamija wa:gadu hattzaru.

(その 手紙は 私が 書いた。)

あわせ文のなかのつきそい文やつづける文の部分に係助辞=duがあっても、つきそい文やつづける文の述語(連用形、連体形、条件形)が強調形になることはないし、いいおわり文の述語もドウむすび形にはならない。ドウむすび形は、ひとえ文(単文)、あるいは、いいおわり文や主文に=duがふくまれるばあいにあられる。

3.1.1.2. 推量

話し手の想像や思考といった間接的な認識をあらわす推量の形として、謝名方言には、一般推量の形と kuse:推量の形があるが、安慶名方言には、一般推量の形だけしかない。

謝名方言

一般推量	hat3-ura padzi	hat3-ara padzi	hat3-u:tara padzi
kuse:推量	hat3-ura	hat3-a:ra	————

安慶名方言

一般推量	katʃ-uru hadzi	katʃ-aru hadzi	katʃ-utaru hadzi
------	----------------	----------------	------------------

3.1.1.2.1. 一般推量

謝名方言の一般推量の形は、numira padzi(飲むだろう)、?aira padzi(あるだろう)、su:ra padzi(するだろう)のように連用語幹に語尾-ira/-uraが接続し、さらに padzi がくみあわさっている。安慶名方言は numuru hadzi(飲むだろう)、?aru hadzi(あるだろう)、suru hadzi(するだろう)の

ように連用語幹に語尾 -uru / -aru が接続し、さらに hadzi がくみあわさっている。謝名方言のばあい、うたがい形と同音で、安慶名方言は、連体形と同音である。

形式名詞 padzi (安慶名方言では hadzi) のついた一般推量の形は、標準語の「するはずだ」に対応する。標準語の「するはずだ」のあらわす、ある確かな根拠をもとにおこなう「当然」の判断から、経験のなかにすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をもとに想像あるいは思考による推量の意味へ、そして、十分に確認されていない根拠による推量の意味にずれている。

謝名方言の一般推量の非過去形は、未来のできごと、進行中のできごとあらわすことができる。第1過去形、第2過去形のつかわれ方は、安慶名方言、謝名方言ともに断定のばあいとはぼおなじである。

63) ?atʒa:ja ʃiNʃi:N numira padzido:.

(明日は 先生も 飲むだろうよ。)

64) tara:ja maNti nu: tʒi:ga?

(太郎も そこで 何を 切りつつあるの?)

?ju:ru tʒi:ra padzi.

(魚を 切りつつあるだろう。)

65) k'inu:N nudara padzi.

(昨日も 飲んだだろう。)

66) ?itta: waraba:ja nu: tʒittʒutaga?

(お宅の 子は 何を 切りヨッタの?)

daki:ru tʒittʒutara padzi.

(竹を 切りヨッタだろう。)

一般推量の第2過去形は、反実仮想をあらわす文の述語としても使用される。

67) ?itta: waraba:ja ?na: ?upp'itʒi ?uibi tʒi:tara padzi.

(お宅の子は　　もう　すこしで　指を　切りヨッタだろう。)

一般推量の形に'etaN(だった、コンピュータ'eN(だ)の過去形)をつけて予定をあらわすことができる。padzi(hadzi)のついた形の詳細な検討が必要である。

68) k'inu:ja siNsi:N numira padzi 'eta:si:ga, numaNtaN.

(昨日は　先生も　飲むはずだったが、　飲まなかった。)

3.1.1.2.2. kuse:推量

謝名方言のばあい、当該の文の部分に係助辞=kuse:がつくとき、述語になる動詞(形容詞、述語名詞も)は、形態論的に形づけられた推量の専用の形式になる。その専用形式を仮に「kuse:推量形」と名づけておく。係助辞=kuse:、および、kuse:推量形は、これまでの調査では今帰仁方言にみられ、沖縄中南部諸方言にはみられない¹⁵。係助辞=kuse:とkuse:推量形が呼応するのも「かかりむすび」といえるだろう。係助辞=kuse:をともなう文の部分がとりたてられた(焦点化された)推量をあらわす。

kuse:推量形の非過去は、連用語幹に-uraを、第1過去は音便語幹に-araをつけてつくる。第2過去形は使用しにくい。それがなぜなのか、もし、使用できるとすればどういう条件のもとにどんな意味をあらわすのか、用例をふやしながら検討したい。

69) p'upp'u:ja neNgadzo:kuse: hatzura.

(祖父は　年賀状を　書くだらう(祖父が書くのは年賀状だろう。))

70) ?unu sakija siNsi:gakuse: numi:ra.

(その　酒は　先生が　飲むのだらう。(飲むのは先生なんだろう))

71) ?ariga kuse: hattzara.

(あいつが　書いたのだらう(書いたのはあいつだろう。))

15 本部町備瀬、具志堅の2集落は、今帰仁村に隣接していて、両集落の方言も今帰仁方言と共通の特徴がおおく、係助辞 kuse: もあるようだ。

72) kinu: kuse: nuda:ra.

(昨日 飲んだんだろう (飲んだのは昨日だろう。))

73) p'app'a:ja nahwatzi kuse: ?id3a:ra.

(祖母は 那覇に 行ったのだろう (祖母が行ったのは那覇だろう。))

今婦仁方言の *ʃit3eN*、安慶名方言の *se:N* (動詞の第2中止形に *?aN* (有る) が文法化して融合・標準語のシテアルに相当) は、先行時における具体的な運動 (動作、変化、状態) の間接的な結果である痕跡や効力 (客体変化動詞のばあい客体結果も) をあらわし、さらに、のこされた客観的根拠にもとづく推論 *retrospective inference* をあらわす¹⁶。 *ʃit3eN*、あるいは *se:N* が現在あるいは過去の出来事の間接的認識である推論しかあらわせないのに対して、一般推量をあらわす形式 (-*pad3i*, -*had3i* をともなう形式) は、想像や思考によって間接的にとらえられた出来事をあらわし、現在や過去の出来事だけでなく、未来の出来事も推論してあらわすことができる (74~76の例は安慶名方言)。

74) waraba:ga watta: harukara ?attʃe:N.

(子供が うちの 畑を 歩いている)。小さな足跡から推論。

75) watta: waraba:ja harukai ?Nd3e:taN.

(うちの 子供は 畑に 行ってあった)。過去にあった痕跡。

76) watta: waraba:ja harukai ?Nd3e:te:N.

(うちの 子は 畑に 行ってあった)。過去の状況からさらに先行する出来事の推論。推論は発話時。

3.1.2. 質問法

両方言ともに YesNo 質問文と疑問詞質問文の述語になる専用形式が存在する。YesNo たずね形も疑問詞たずね形も上昇イントネーションは義務的では

¹⁶ *ʃit3eN* (安慶名方言 *se:N*) は、客体結果や痕跡、効力、客観的根拠にもとづく推論をあらわしていて、パーフェクトとかかわる形式だが、この形式もテンス・アスペクト・ムードが相互にからみあったものである。

ない。YesNo たずね形も疑問詞たずね形も、テンスによって非過去形、過去形（第1過去形・第2過去形）が対立する。質問法の第2過去形も直接知覚を明示し、人称制限がある。すなわち、2人称を主語にした質問文の述語になれず、聞き手自身の動作や変化についてたずねることができない。そのときは、第1過去形を使用する。歴史的な過去の事実について質問するときも第1過去形を使用する。

話し手自身のアクチュアルな動作や変化について話し手自身がわすれてしまったとき、第2過去形を使用して知覚（直接確認）した可能性がたかい人（聞き手）に対してたずねる。

3.1.2.1. YesNoたずね

非過去形は、両方言ともに未来の予定や計画、話し手の意志などを質問する文の述語になることができる。

77) ?ja:N numimi? ?iN, numiN.

（お前も 飲むか？ うん、飲む）

78) nabija ?ja:ga muttзуми? waNga muttзуми?

（鍋は 君が 持つか？ 私が 持つか？）

今帰仁方言のばあい、YesNo 質問文の述語が非過去形するとき、話の瞬間に進行する動作や変化をたずねることができる。そのとき、話し手も聞き手も現場にいて、進行する出来事を話し手が十分に確認できず、それを知りうる聞き手にたずねる。そのばあい、人称の制限はないようである（ただし話し手のこととはたずねられない）。進行中の出来事の不確定の部分に係助辞 =du をつける。=du なしで YesNo たずね形を述語にすると、進行の意味はあわせられないようである。なお今後の検討が必要である。

79) ?ja: tigamidu hatзуми?

（君、手紙を 書いているの？）何か書いているようだが、確認できない。書いている人に何を書いているのか、手紙を書いているのかをたずねる。

80) ?amidu puNna: ?

(雨が 降っているの?) 雨が降っているようだが、部屋にいて直接確認できず、そとにいる人に質問する。

81) giNko:nu fatta:gadu ?atzumi ?

(銀行の シャッターが 開きつつあるの?)

82) ?ana:du puNna: ?

(穴を 掘っているの?)

83) ?ja:. sakidu numiNna: ?

(君、酒を のんでいるの?)

?iN, saki: numiN.

(うん、酒を のんでいる。)

第2 過去形を述語にして質問するとき、聞き手が出来事を知覚した (その可能性がたかい) という話し手の判断がある。これは両方言に共通する。

84) ?ja:garu ?anu kaNbaNja hattzi: ?

(君が あの 看板を 書いたのか?)

85) t3att3a:ja kusui numi:taNna: ? ?iN, numi:taN.

(祖父は 葉を 飲ミヨッタか? うん、飲ミヨッタ。)

86) p'upp'u:N hat3uti: ?

(祖父も 書キヨッタカ?)

3.1.2.2. 疑問詞たずね

87) hoimunuja taruga ?it3uga ? tara:ga ?it3uN.

(買い物は 誰が 行く? 太郎が 行く。)

88) ?ja: nu: numiga?

(君、何を のんでいるの?)

waNna:.. tʃa: numiNjo:.

(私か。 お茶を のんでいるよ。)

89) nu: mudaga? saki mudaN.

(何を 飲んだの? 酒を 飲んだ。)

90) kaNbaNja taruga hatzuga?

(看板は 誰が 書くか?)

91) ?arija nu:ri ?itzaga?

(あいつは 何と 言った?)

92) p'upp'u:ja da:ni 'uitaga?

(祖父は どこに いた?)

93) waNja nu: numi:t'aga?

(私は 何を 飲ミヨツカ?)

?ja:ja bi:ru numi:t'aN.

(君は ビールを 飲ミヨツタ。)

疑問詞たずね形が終助辞 =ja: をともないながら、文中に疑問詞をふくまない文の述語になるとき、かならずしも聞き手の存在を前提にしない、話し手がうたがわしいと感じた出来事について表現する文になる。

94) ?aie:na:, waritussa:. p'upp'u:garu ?ututzagaja:.

(ああ、割れているぞ。祖父が 落としたのかな。)

95) nu:ge:ra ?ai:figa, ?i:figaru ?aigaja:.

(何か あるが、石が あるのかな。)

疑わしいと思われることがらを焦点化するときには、その文の部分に係助辞 =du をつける。

96) gakk'o:ka'ti ?idzagaja:.

(学校に 行ったかなあ。)

97) ?asara mi:raN:figa, gakk'o:kat'idu ?idzagaja:.

(朝から 見えないが 学校に 行ったのかな。)

98) watt'a: k'wa:N beNkjo: ſitſuigaja:.

(うちの 子も 勉強 しているかなあ。)

99) ta:ge:ra beNkjo: ſitſuifiga, watta: k'wa:gadu beNkjo: ſitſuigaja:.

(誰か 勉強 しているが、うちの 子が 勉強しているのかな。)

3.1.2.3. duむすびたずね

述語以外の文の部分に係助辞 =du が後接する YesNo 質問文の述語になる専用形式が du むすびたずね形である¹⁷。安慶名方言には du むすびたずね形があるが、謝名方言にはない。安慶名方言の YesNo 質問強調文は、=du を後接させる文の部分焦点化されている。du むすびたずねの非過去形は、du むすび形の後に質問の意をあらわす接辞 i がついている¹⁸。

100) ?ja:garu ?anu kaNbano: katſarui?

(君が あの 看板を 書いたのか。)

101) na:da mi:sarumuNnu. jugurito:guturu ſiti:rui?

(まだ 新しいのに、 汚れているから 捨てるのか。)

102) haruſiguto: ta:ga saga? ?ja:garu sarui?

(知仕事は 誰が したの。 おまえが したの?)

103) watta: kkwaja gakko:Nkairu ?Ndzo:rui?

(うちの 子は 学校に いつているの?)

104) na:da he:sarumuNnu, ?i:na niNdzi:du surui?

(まだ 早いのに、 もう 寝るの?)

安慶名方言の係助辞 =du をともなう質問文のばあい、必ずしも述語を du むすびたずね形にしなくてもよく、係助辞 =du とドウむすびたずねの形の呼応がくずれつつある。

17 疑問詞質問文を du 強調文にすることはできない。

18 接辞 -i は、YesNo たずね形の num-imi (飲むか)、nud-i (飲んだか)にもふくまれている。

3.1.2.4. 念おしたずねの形

念おしたずねの形は、話し手が推量した出来事のただしさを聞き手に確認要求をあらわす文の述語にも使用される。このばあい、終助辞 =ja: の後接が義務的である。この形式をいま仮に「念おしたずねの形」とよぶ。

105) ?ja:N madzuN ?itʒura=jɑ:?

(君も 一緒に 行くだろう?)

106) ʃiNʃi:ja na: su:ra=jɑ:?

(先生は もう 来るだろう?)

107) p'upp'u:ja kusui nudara=jɑ:?

(おじいさんは 薬を 飲んだらう?)

念おしたずねの形は、かならずしも聞き手を必要とせず、話し手自身の不確かな、うたがわしいとかんがえることがらに対する認識を表現するうたがわしい文の述語としても使用される¹⁹。このばあい、文のあらわす出来事全体がうたがわしいわけではなく、話し手がかつきりと確認できず、疑問におもっていることがらをさしめす文の部分に係助辞 =ga を後接させたり、疑問詞に係助辞 =ga を後接させたりして話し手の不確かな判断がさしだされるのだが、かならずしも聞き手に答えを要求しないという意味では本来の質問文とはいえない。その文の述語として、係助辞 =ga のついた文の部分と呼応して使用されるのが念おしたずねの形である（このばあい、終助辞 =ja: はつかない）。係助辞 =ga がついて焦点化された文の部分と述語の念おしたずねの形が呼応してあらわれる。これも「かかりむすび」のひとつであろう。

108) tiga:mija p'upp'u:gaga hatʒura. p'app'a:gaga hatʒura.

(手紙は 祖父が 書くのだらうか。祖母が 書くのだらうか。)

19 鈴木(1962)は、この形式を「うたがわ法」とよび、「ことがらを断定できない、うたがわしいものとして述べる活用形である。この形は助詞(あるいは接尾辞) -ga (うたがわしい部分につける)と呼応して用いられるのが普通である」と記述している。

- 109) ʃiNʃi:ja ko:hi:ga numira. tʃa:ga numira.
 (先生は コーヒーを 飲むのだろうか。 お茶を 飲むのだろうか?)
 nu: suko:re: ʃimigaja:.
 何を準備すれば いいんだらう。)
- 110) tʒattʒa:ja kuruma nutuiʃiga, da:tʒiga ʔitʒura.
 (父は 車に 乗っているが、どこに 行くのだらう。)
- 111) tʒattʒa:ja mi:raNʃiga, da:niga 'uira.
 (父は (姿が) 見えないが、どこに いるのだらう。)
- 112) nu:ga nudara. tʒu:tʒei maʃi nattutaN.
 (何を 飲んだのか。たちまち よく なっていた。)
- 113) ʔarija sakiga nuduirea. tʒiranu ʔakase:ʃiga.
 (あいつは 酒を 飲んでいるのか。顔が 赤いんだが。)

念おしたずねの形が確認要求をあらわす文の述語になるとき、推量的な意味を有していること、謝名方言の *kuse:* 推量の形と念おしたずねの形とが同音であることから、一般推量の形の *numira padʒi* や *nudara padʒi* も推量をあらわす形に *padʒi* が後続しているとかんがえられる。そして、もうすこし慎重に検討しなければならないが、安慶名方言などの一般推量の形もかつては、謝名方言などとおなじ *numura* や *nudara* だったのではないかともかんがえられる。

		謝名方言	安慶名方言
一般推量	非過去	<i>numira padʒi</i>	<i>numuru hadʒi</i>
	第1過去	<i>nudara padʒi</i>	<i>nudaru hadʒi</i>
kuse:推量	非過去	<i>numira</i>	<i>numura</i>
	第1過去	<i>nudara</i>	<i>nudara</i>
念おしたずね	非過去	<i>numira</i>	<i>numura</i>
	第1過去	<i>nudara</i>	<i>nudara</i>

安慶名方言のばあいには、連体形と同音で、形式名詞 *hadʒi* にかかっているのだが、謝名方言の一般推量の形は、語末が *-a* になり、語尾に *-a* をふくんで

いる¹⁹。謝名方言の一般推量の形は検定教科書文法の「未然形」が形式名詞 padzi にかかっているようにみえる。これはどうかんがえたらよいであろう。

この形式の語尾 -a のうしろに、かつては、*mu、あるいは、それに準ずる形式が存在していたのではないかとおもわれる。語尾*-amu は、古代日本語のいわゆる「推量の助動詞」の連体形に相当するものではないだろうか。語尾*-amu は、推量をあらわす形だけでなく、完成相の勧誘形 num-a: (飲もう)、hak-a: (書こう)、uir-a (居よう) にもついていたとかんがえるべきだろう。継続相のばあい、念おしたずねの形の nudura (のんでいるだろう) が継続相の勧誘形 nudura (飲んでいよう) と同音形式になっていることもそれをうらづけているとかんがえる。古代日本語の推量や意志をあらわす形の語末の-mu と同じものが謝名方言や安慶名方言にもあり、それがすりきれたのではなかろうか²¹。これらの詳細な検討もわれわれにのこされた課題である。

付記：安慶名方言、謝名方言の動詞の述語形式のうち、終止形の直説法、質問法を中心に、両方言を比較しながら概略を記述したが、紙幅の都合ではたつきかけ法の記述も、否定形式の述語形式、様々なテンス・アスペクトにかかわる述語形式の記述もおこなえなかった。かりまた、島袋がそれぞれの方言の記述をおこないつつ、沖縄方言の述語形式を琉球語全体に位置づけていくこともふくめて今後へのこされた課題である。

なお、本論文は、「方言における述語構造の類型論的研究」(平成15年～17年科研(B)(1)研究代表者：大阪大学大学院工藤真由美)、および「方言における動詞の文法的なカテゴリーの類型論的研究」(平成13年～14年科研(B)(1)研究代表者：大阪大学大学院工藤真由美)の研究成果の一部である。

20 上村(1963)によると首里方言にも「junuru hazi」のほかに「junura hazi(読むだろう)」の語形の存在が指摘されている。おなじく上村(1963)に「junuira(読んでいるのだろう)」の語形がある。沖縄方言の推量表現をかんがえるとき、この記述は重要である。

21 聞き手に動作の実現をもとめるさそいかける形(勧誘形)の語尾は、現在では -a だが、かつては、その後に接辞の *mu があつたと考えられる。与論方言では勧誘形が kakaN(書こう)、jumaN(読もう)などのように、語尾にNがふくまれている。与論方言の勧誘形の語尾にふくまれるNは、かつて *mu だったので、沖縄方言ではすりきれたのである。

【参考文献】

- 上村幸雄(1963)「首里方言の文法」『沖縄語辞典』58-86
- 奥田靖雄(1997)「動詞(その1)・その一般的な特徴づけ」『教育国語』2-27
むぎ書房
- 奥田靖雄(1996)「文のこと・その分類をめぐって」『教育国語』2-22、2-14、
むぎ書房
- 奥田靖雄(1994)「動詞の終止形(3) 講座・教師のための文法」『教育国語』2-13、
34-40 むぎ書房
- 奥田靖雄(1994)「動詞の終止形(2) 講座・教師のための文法」『教育国語』2-12、
27-42、むぎ書房
- 奥田靖雄(1993)「動詞の終止形(1) 講座・教師のための文法」『教育国語』2-9、
44-53、むぎ書房
- 奥田靖雄(1985)「おしはかり(2)」『日本語学』2巻4号、48-62、明治書院
- 奥田靖雄(1984)「おしはかり(1)」『日本語学』3巻12号、54-69、明治書院
- 工藤真由美編(2004)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究
を超えて—』東京:ひつじ書房
- 工藤真由美(2004)「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」(『阪大
日本語研究』16、1-17)
- 工藤真由美(2004)「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座6文法Ⅱ』
172-192、朝倉書店
- 工藤真由美(2000)「方言のムードについてのおぼえがき」『待兼山論叢第34号日
本学篇』1-14
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の
表現』東京:ひつじ書房
- かりまたしげひさ(2004)「沖縄方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード—沖
縄県具志川市安慶名方言のばあい—」『日本語ののアスペクト・テンス・ム
ード体系—標準語研究を超えて—』220-265. 東京:ひつじ書房
- 狩俣繁久・島袋幸子(1989)「今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリー—アスペ
クトとヴォイス—」『ことばの科学2』135-157.東京:むぎ書房

- 島袋幸子(1992)「沖縄北部方言」『言語学大辞典第3巻下巻』814-829、三省堂
- 島袋幸子(1987)「今帰仁方言における動詞のテンス・アスペクト」『琉球方言論叢』491-501.沖縄：琉球方言論叢刊行委員会
- 鈴木重幸(1996)『形態論・序説』東京：むぎ書房
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』東京：むぎ書房
- 鈴木重幸(1960)「首里方言・動詞のいいきりの形」(『国語学41号』)
- 津波古敏子(1992)「沖縄中南部方言」『言語学大辞典第3巻下巻』829-848、三省堂